

文化言語学編集委員会
編

文化言語学

その提言と建設

三省堂

エストニア語の接格 (adessive) について

松 村 一 登

1. はじめに

エストニア語は、¹⁾フィンランド語やハンガリー語とならんで名詞の格が多い言語として知られている。エストニア語の標準語の文法では、名詞(形容詞・代名詞・数詞等を含む)が、表1にしめす14の格に活用すると²⁾されている。

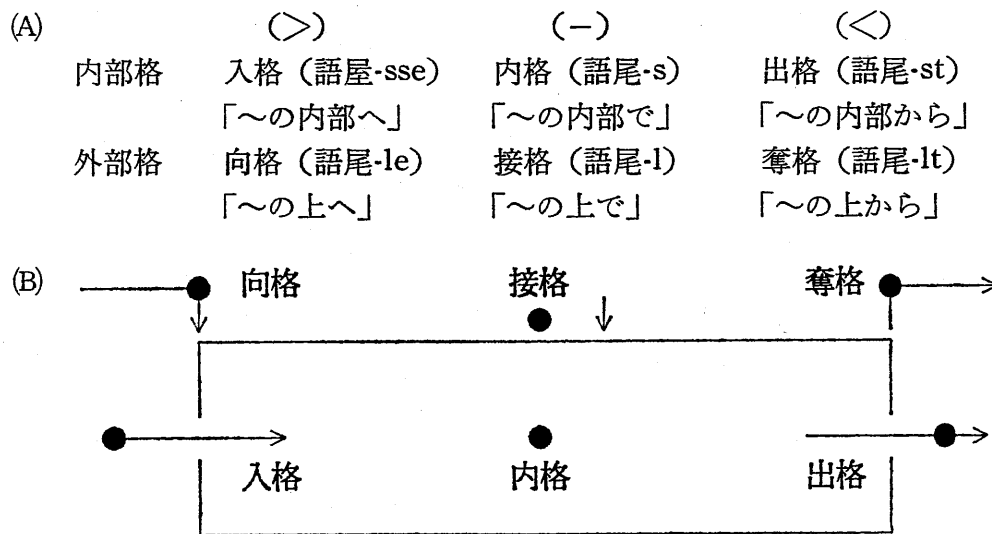
表1 名詞 **kirik** 「教会」の格変化 (単数形のみ)

1. 主格 (nominative)	kirik	教会 (が)
2. 属格 (genitive)	kiriku	教会の / を
3. 分格 (partitive)	kirikut	教会を
4. 入格 (illative)	kirikusse	教会 (の中) へ
5. 内格 (inessive)	kirikus	教会 (の中) で
6. 出格 (elative)	kirikust	教会 (の中) から
7. 向格 (allative)	kirikule	教会に対して
8. 接格 (adessive)	kirikul	教会において
9. 奪格 (ablative)	kirikult	教会から
10. 変格 (translative)	kirikuks	教会に [なる]
11. 様格 (essive)	kirikuna	教会として
12. 到格 (terminative)	kirikuni	教会まで
13. 欠格 (abessive)	kirikuta	教会なし (で)
14. 共格 (comitative)	kirikuga	教会と / を用いて

14の格のうち、4番目の入格から9番目の奪格までの6つの形は、標準文法で「場所格」(local cases) と呼ばれる。場所格は、「内部場所格」(internal local cases) と「外部場所格」(external local cases) と呼

ばれる2つの系列に分かれるとされる(以下、内部場所格を「内部格」、外部場所格を「外部格」と略す)。内部格と外部格には、それぞれ、運動の目標や終点を表す形式、動作・行為が行われる場所や人や物などが存在する場所を表す形式、運動の起点や始点を表す形式の3つが認められる。場所格の体系を図式化すると、たとえば、³⁾図1のようになる。

図1 場所格の体系



本稿は、文法書や入門書でこのように記述されている6つの格の中の、接格と呼ばれる形式で現れる名詞句の用法に関する覚え書きである。

2. 接格は場所格だろうか

エストニア語の接格は、その意味の多様性において、日本語のデ格やニ格に匹敵すると言ってよいが、エストニア語の文法書における接格の扱いは、一般にきわめて簡単である。たとえば、Lavotha (1973, 95) は、接格は「何かの上に(表面に)あること」(die Befindlichkeit auf etwas (auf einer Oberfläche))を表すとし、接格の用法を、「場所の規定」「時間の規定」「所有構文における用法」の3つにまとめている。例文(1)~(3)は、接格の3つの用法を示す典型的な例である(接格名詞句はイタリックで示す)。

- (1) Raamat on laua-l. [場所表現]
 book. NOM be. 3sg desk. ADE
 本が机の上にある。
- (2) Talve-l on külm. [時間表現]
 winter. ADE be. 3sg cold. NOM
 冬(に)は、寒い。
- (3) a. Raamatu-l on ilus kaas. [所有構文]
 book. ADE be. 3sg beautiful. NOM cover. NOM
 (その)本は表紙が美しい [本には美しい表紙がある]。
- b. Mu-l on kerge õppida. [所有構文の変種]
 Isg. ADE be. 3sg light. NOM study. INF
 わたし(に)は学ぶのがやさしい。

例文(1)~(3)のような例だけをみると、接格はまず、例文(1)のように、存在場所やものごとの起こる場所のような物理的な場所を表し、例文(2), (3)のように状態、時間、所有者 (=被所有物の存在場所) を表す用法は、物理的な場所を表す用法に基づく派生的な用法であるという解釈が可能なように思われる。また、この解釈は、論理的 (認知的?) にも筋が通っており、文法書や一般言語学の教科書の記述として、申し分ないと言える。

しかし、論理的に妥当と思われる説明が、接格名詞句の用法の実際の記述として妥当であるかどうかは、自ら別の問題である。ここでは「基本的な用法」とは、もっとも典型的な用法であり、したがってもっとも頻度が高い用法であると考えて、接格名詞句の基本的な用法は物理的な場所を表す用法であるとする主張が、実証的に妥当なものであるかどうか調べてみることにしたい。

延べ語数約37,000語のエストニア語のテキストから、接格の用例と、比較のために、内格の用例もすべて拾って、分類を試みた結果を表2に示す⁴⁾。

内格の場合、場所表現と見なすことができるのは、全用例 (640例) の79% (506例) で、そのうちの53% (269例) が、本来の意味での場所 (物

理的な場所)を表すと見なせる用法であった。言い換えると、比喩的でない場所表現が、内格の用例全体の42%を占めている。他方、時間を表す用

表2

	接格名詞句	内格名詞句
場所表現(物理的な場所)	210 (69)	506 (269)
時間表現	192	13
所有構文の接格	391	—
その他	107	121
合計	900	640

例は非常に少なく、2%である。この結果を見る限り、内格の典型的な用法は場所表現と言ってよく、内格を場所格とする伝統的な考え方は、妥当である。

接格の場合、場所表現と見なすことができるのは、全用例(900例)の23%(210例)で、そのうち、本来の意味での場所(物理的な場所)を表すと見なせるのは、場所表現全体の33%(69例)にすぎなかった。これは、接格の用例全体の8%弱である。接格の全用例の中で、時間表現は21%(192例)で、場所表現とほぼ同じ割合を占める。これに対し、接格名詞句の用法でいちばん多いのは、内格名詞句には対応する用法がない「所有構文の所有者」を表す用法と、その派生的用法の用例で、接格の用例全体の43%(391例)を占める。したがって、接格は、場所表現において用いられることは比較的少なく、場所表現以外での用法の比率が高くなっていると言える。

内格と接格の間に見られる用法の差は、ほぼそのまま入格と向格、出格と奪格の間にも見られる。すなわち、6つの場所格の用法を比較してみると、内部格(入格、内格、出格)は、場所表現に用いられることが圧倒的に多いのに対し、外部格(向格、接格、奪格)は、場所以外の表現として用いられることが多いという事実が明らかになる。場所格とされている向格、接格、奪格の典型的な用法は、場所を表す用法ではないことになる。

従来文法書でとられている考え方は、エストニア語には、内部格（入格、内格、出格）と外部格（向格、接格、奪格）という、「ものの内部」と「ものの表面・近傍」という意味的な対立をなす2つの場所格の系列があるとすることである。この考え方によるなら、接格はまず場所を表す格ということになる。しかし、これでは、文(3)に代表される非場所格的用法（以下「接格の第3用法」と呼ぶ）が、接格のもっとも普通の用法であるにもかかわらず、あたかも副次的用法にすぎないかのような印象が作り出されてしまう。エストニア語の記述文法の立場から考えるなら、接格を場所格とは見ない方が、その現実の用法を把握しやすいのではないだろうか。

3. 接格の第3用法

接格の第3用法は、以下にあげる(4)から(11)までの例文が示すように、所有構文の所有者を表す(4a)に始まり、使役文の被使役者 (causee) を表す(11)のような用法に至るまで、お互いに共通点をもちながら少しずつ異なる一種の連続体をなしているように思われる。このような接格の用例を、「場所表現」「時間表現」のように「～表現」とせずに、「第3用法」という名前と呼ぶのは、特定の意味のカテゴリーと同定できないからである。

(4)の3つの構文において、(4a)は所有文と呼ばれる。所有文のひな型は、この文の「猫」のように具体物をさす名詞句が現れる場合である。これに対し、(4b)のように、「空腹」のような具体物を表さない名詞が被所有物に相当する位置に現れると、所有の意味が薄れる。さらに、(4c)のように、形容詞が現れる文では、所有の意味はまったくない。

(4) a. *Tal on kass.*

3sg. ADE be. 3sg cat. NOM

彼女は猫を飼っている [猫を所有している]。

b. *Tal on nälg.*

3sg. ADE be. 3sg hunger. NOM

彼女は空腹だ。

c. *Tal* on külm.
3sg. ADE be. 3sg cold. NOM

彼女は寒い。

(5)は、所有文に被所有物の存在場所を表す場所表現が添えられたもので、どちらも所有文の変種であるが、意味はかなり異なる。場所表現が、被所有物を表す名詞句の前に添えられている(5a)は、文末の *kass*「猫」が新情報⁵⁾となるので、(4a)を詳しく述べた所有文と見なしてかまわない。これに対して、場所表現が文末に来る(5b)では、場所表現が新情報、彼女が猫を持っていることが旧情報となるので、「彼女の猫は家にいる」に近い意味となり、所有文としての意味は薄れている。

(5) a. *Tal* on kodu-s *kass*.
3sg. ADE be. 3sg home. INE cat. NOM

彼女は家に猫を飼っている。

b. *Tal* on *kass* kodu-s.
3sg. ADE be. 3sg cat. NOM home. INE

彼女の猫は家にいる。

所有文としての意味が薄れた(5b)の構文は、(6)のような構文につながる。この構文の接格名詞句は、主格で表された名詞句に対して、所有を表す属格の修飾語に相当するものとして働き、ふつう、属格修飾語を用いて言い換えが可能である。

(6) a. *Tal* on *kõht* *täis*.
3sg. ADE be. 3sg stomach. NOM full

彼女はお腹が一杯だ。

b. *Tal* on *ema* *haige*.
3sg. ADE be. 3sg mother. NOM sick. NOM

彼女は母親が病気だ。

c. *Tal* on *maja* *müü-dud*.
3sg. ADE be. 3sg house. NOM sell. INDEF. PERF

彼女は家を売却した。

(6)では、述語動詞が、英語の be 動詞にあたる動詞 *olema* のみであるが、(7)のように、一般動詞も現れる。

(7) a. *Tal valuta-b hammas.*
3sg. ADE ache. 3sg tooth. NOM

彼女は歯が痛い。

b. *Tal sur-i laps.*
3sg. ADE die. PAST. 3sg child.NOM

彼女は子供が死んだ。

c. *Tal käi-b ema töö-l.*
3sg. ADE go. 3sg mother. NOM work. ADE

彼女は母親が勤めに出ている。

d. *Tal jä-i isa haige-ks.*
3sg. ADE stay. PAST. 3sg father. NOM sick. TRA

彼女は父親が病気になった。

(7)では、(6)の場合と同じく、属格修飾語相当の接格名詞句が関係するのは主語であるが、(8)のように、述語動詞が他動詞になると、接格名詞句は目的語にかかることも可能である。

(8) a. *Tal põleta-ti talu maha.*⁶⁾
3sg. ADE burn. INDEF. PAST farm. NOM down

彼女は家屋敷を焼かれた。

b. *See teg-i tal hinge täis.*
DEM. NOM do. PAST. 3sg 3sg. ADE soul. GEN full

彼女はそのことでかんかんになった [彼女の魂を満たした]。

(4b)の変種に、(9a)のような構文がある。(9a)は、所有文の被所有物の位置に、不定詞句を伴った抽象名詞が現れているもので、接格名詞句は、この不定詞の主語の役割も果たしている。なお、所有文の被所有物の位置に名詞句以外の成分が現れた(9b)(9c)は、(4c)の変種と考えられる。

- (9) a. *Tal on soov kodu-s olla.*
 3sg. ADE be. 3sg wish. NOM home. INE be. INF
 彼女は家にいたい [いたいという希望がある]。
- b. *Tal on vaja kodu-s olla.*
 3sg. ADE be. 3sg needed home. INE be. INF
 彼女は家にいる必要がある。
- c. *Tal on mugav kodu-s olla.*
 3sg. ADE be. 3sg cosy. NOM home. INE be. INF
 彼女は家にいるのが快適だ。

不定詞の主語となる接格名詞句は、(10)のように不定詞を伴う非人称動詞構文にも現れる。

- (10) a. *Tal õnnestu-s ülikooli astu-da.*
 3sg. ADE succeed. PAST. 3sg university. ILL enter. INF
 彼女は首尾よく大学に入った。
- b. *Tal läks korda välismaa-le põgene-da.*
 3sg. ADE go. PAST. 3sg order. ILL abroad. ALL flee. INF
 彼女はうまく外国に逃亡することができた。

(10)の接格名詞句に通じるのは、(11 a)のような使役文の被使役者を表す接格名詞句である。また、(11 b)の *lubama* 「許可する」のように、使役文と同じ構文をとる動詞がいくつか見られる。

- (11) a. *Jaan lase-b tal vene keele-s vasta-ta.*
 Jaan.NOM let.3pl 3sg.ADE Russian tongue.INE answer. INF
 ヤーンは彼女にロシア語で答えさせる。
- b. *Jaan luba-b tal vene keele-s vasta-ta.*
 Jaan.NOM allow.3sg 3sg.ADE Russian tongue.INE answer. INF
 ヤーンは彼女がロシア語で答えるのを許す。

4. 接格の位置づけ

従来、接格の第3用法の多様さに、十分な注意が払われてこなかったのは、すでに述べたように、接格を場所格として位置づける文法記述の枠組みの呪縛のためと思われる。接格の用法の中でもっとも頻度の高い、この第3用法（場所や時間を表さない用法）の研究を進めるにあたって、手がかりとなるいくつかの視点にふれておきたい。

第1に、フィンランド語の接格とエストニア語の接格の間の基本的な違いを、それぞれの言語の格組織と関係づけて明らかにする必要がある。

まず、エストニア語の接格の第3用法のうち、所有文の所有者を表す用法は、フィンランド語の所有文における接格の用法に対応する用法である。この場合、所有者を表す接格名詞句を、存在文における存在場所の表現に対応するものと考えれば、所有文は存在文と紙一重の関係にあると考えることができる。すなわち、典型的な所有文とは、あるものがある人の影響範囲に存在することを述べる存在文の変種とみなすことができる。ただし、所有文における接格名詞句が、場所表現とははっきり区別すべきことを示す根拠がある。所有者が典型的な人でない場合には、接格と内格の間で、(12)のような最小対立が可能となるからである。

(12) a. *Ülikooli-l* on suur raamatukogu. [所有文]
 university. ADE be. 3sg big. NOM library. NOM

大学には大きな図書館がある。

b. *Ülikooli-s* on suur raamatukogu. [存在文]
 university. INE be. 3sg big. NOM library. NOM

大学には大きな図書館がある。

所有文 (12 a) は、「大学」を組織として捉えており、大学に属する施設として大きな図書館があることを述べている文である。これに対し、存在文 (12 b) は、「大学」をある場所を占める存在として捉え、大きな図書館が問題の大学の敷地のなかにあることを述べている文である。このような存

在文と所有文の対立は、基本的にフィンランド語でも可能である。

エストニア語の接格の第3用法のうちで、フィンランド語の接格の用法に、言語史的に対応している可能性のあるものは、(11a)のような使役を表す文における被使役者を表す接格名詞句である。しかし、2つの言語の事実を共時的に関係づけるには、問題がいくつかある。まず、フィンランド語で被使役者の接格が現れるのは、(13)のような使役動詞を用いた構文であって、(11a)に対応する分析的な使役構文においてではない。

- (13) Äiti leivo-tta-a Liisa-lla kaku-n.
 mother. NOM bake. CAUS. 3sg Liisa. ADE cake. ACC
 母親がリーサにケーキを焼かせる。(松村 1985)

さらに、フィンランド語の接格は、道具・手段を表す形式として広く用いられ、使役構文で用いられる接格も、道具・手段を表す用法の特別な場合として解釈されるが、エストニア語ではこの解釈は不可能である。エストニア語の接格にも、道具・手段を表す格としての用法があったらしいことは、言い回しとして痕跡的に残っている道具・手段を表す接格形 (Wiedemann 1875, 331) や、様態を表す接格表現の存在によって推定されるが、(11a)のような構文を根拠に、現代エストニア語の接格に道具・手段を表す用法を認めることには無理がある。すでに述べたように、エストニア語の使役構文における接格名詞句は、むしろ(10)のような構文に現れる接格名詞句と関係づけるのがふさわしい。

このように、所有文での用法を除くと、エストニア語の接格の第3用法は、フィンランド語の接格の用法とは関係づけられないことがわかる。エストニア語の接格が抽象的な意味で用いられることが多いのに対し、フィンランド語の接格が、場所や道具・手段の表現など、具体的な意味で用いられることは、注目すべき事実である。

第2の視点は、(9)(10)(11)のように、接格名詞句が不定詞の主語として解釈される場合の条件を、語彙的、構文的に分析する必要性である。この問題は、エストニア語のシンタクスの問題として、不定詞を伴う構文一般の分

析の中に位置づけられるべきテーマである。

この問題を考察するにあたって、フィンランド語との対照は面白い視点を提供してくれる。すでに述べたように、エストニア語で不定詞（正確には da-不定詞）の主語を表す名詞句の形態は接格である。これに対し、フィンランド語では、(14)のように属格が用いられる。

(14) a. *Minu-n täyty-y olla kotona.* [cf. (9b)]

1sg. GEN must. 3sg be. INF at home.

わたしは家にいなければならない。

b. *Minu-n on hyvä olla kotona.* [cf. (9c)]

1sg. GEN be. 3sg good. NOM be. INF at home.

わたしは家にいるのが楽しい。

c. *Opettaja anta-a minu-n laula-a.* [cf. (11a)]

teacher. NOM give. 3sg 1sg. GEN sing. INF

先生がわたしに歌わせる。

(11)に用いられる接格が、(9)(10)の接格とは言語史的に起源を異にすると考えられるにも関わらず、三者を同じタイプの現象とみなすのはこのためである。⁷⁾

第3の視点は、(5)(6)(7)(8)のように、接格名詞句が属格修飾語に相当する意味に解釈される場合の意味的・構文的な分析である。この種の接格名詞句には、ドイツ語の「任意の与格」(freier Dativ; 以下「与格」)の用法に通じるところがあり、地域言語学 (areal linguistics) や類型論に興味深いテーマを提供する。

エストニア語の接格にドイツ語の与格に通じる用法があることは、すでに Wiedemann (1875, 333) が指摘し、たとえば(15)のような用例に対して、それぞれ(16)のようなドイツ語訳を添えている。⁸⁾

(15) a. *Mul puudu-b raha.*

1sg. ADE lack. 3sg money. NOM

わたしはお金がない。

- b. *Mul* on hobune varasta-tud.
1sg. ADE be. 3sg horse. NOM steal. INDEF. PERF

わたしは馬を盗まれてしまった。

- (16) a. *Mir* fehlt Geld. [cf. (15a)]
b. *Mir* ist ein Pferd gestohlen. [cf. (15b)]

ドイツ語の任意の与格には、その主な下位タイプとして、ふつう、「利益/不利益の与格」(dativus commodi/incommodi; (17)), 「所有の与格」(possessiver Dativ, Pertinenzdativ; (18)), 「関心の与格」(dativus ethicus; (19)) が認められている。

- (17) a. Hans wäscht *seinem Vater* das Auto. [利益の与格]
ハンスは父親のために車を洗った。
b. Das Kind zerbrach *den Eltern* die Vase. [不利益の与格]
子どもは(両親の意に反して)花瓶を壊してしまった。
(18) a. *Der Mutter* zittern die Hände.
母親は手が震える。
b. Die Schwester verband *ihm* die Wunde.
看護婦は彼の傷に包帯を巻いた。
(19) Bringt *mir* dem Lehrer die Hefte pünktlich!
(お願い) 期日通りに先生にノートを持って行ってね。

ドイツ語の与格の用法のうちで、エストニア語の接格の用法に通じるのは、主として所有の与格である。関心の与格に相当する言い方はエストニア語にはなく、利益・不利益の与格に相当する場合は、エストニア語では、(9)のような例を除いて、接格ではなく向格によって表される。

エストニア語の第3用法の接格とドイツ語の任意の与格には、必ず人を表す名詞句であるという共通の特徴がある。また、所有の与格は、一般に、属格名詞句を用いた表現による言い換えが可能である点でも、エストニア語の接格と共通している。バルト海沿岸地域の歴史を考慮すれば、この類似性が言語接触の結果である可能性が考えられるが、これは独立した論考

において考察すべきテーマである。

略語表

ACC	対格 (accusative)
ADE	接格 (adessive)
ALL	向格 (allative)
CAUS	使役動詞を作る形態素 (causative)
DEM	指示詞 (demonstrative)
GEN	属格 (genitive)
ILL	入格 (illative)
INDEF	不定人称 (indefinite person)
INE	内格 (inessive)
INF	不定詞 (infinitive)
NOM	主格 (nominative)
PAST	過去 (past)
PERF	完了 (perfective)
TRA	変格 (translative)
1sg	1人称単数 (first person singular)
3sg	3人称単数 (third person singular)
3pl	3人称複数 (third person plural)

注

- 1) エストニア語 (eesti keel, Estonian) は、ウラル語族フィン・ウゴル語派バルト・フィン諸語に属する言語で、バルト3国のひとつエストニアの公用語である。エストニア語の母語話者はおよそ100万人、このうちの9割がエストニア本国に住む。エストニア語はラテン文字で表記される。本稿におけるエストニア語の例文等は、必要に応じて形態素の境界をハイフンで示したほかは、正書法のままである。エストニア語の文法構造の概要は、松村(1988)を参照。
- 2) 本稿では、動詞の人称変化 (conjugation) だけでなく、名詞の格変化 (declension) も「活用」と呼ぶ。本稿で「格」と呼ぶのは、名詞の「活用形」のことであって、ときに「形態格」などと呼ばれる形態論的な概念としての格である。この意味での格を、格文法的な考え方における「格」の概念、すなわち、名詞句の動詞に対する意味論的・機能的な関係、言い換えると、

文の意味構造を動詞を中心に記述する場合の名詞句の意味的な役割と混同してはならない。エストニア語の格の日本語名は松村(1988)に従う。標準文法では、14の格を表1のような順番で並べる慣例がある。それぞれの格形にそえた日本語訳は、便宜上のもので、意味記述ではない。

- 3) 図1の(A)は Matthews (1953, 297) に、(B)は Päll et al. (1962, 101) および Leberecht (1989, 11) に基づく図式である。
- 4) 資料として用いたのは、Mänd (1983) の pp. 3~66 (延べ語数18, 559語) と Luts (1982) の pp. 7~72 (延べ語数18, 604) の2つの文学作品である。前者(『小さなタンポポたち』)は、1926年生まれの児童文学作家(女性)の作品で、おばあさんが少女時代を回想して孫に語る形式で書かれた子供向けの読み物であり、後者(『春』初版1913)は、ギムナジウムに通う少年を主人公とするエストニアの青春文学の代表作である。
- 5) エストニア語では、新情報を担う構成素は、一般に文末に置かれる。
- 6) 不定人称文(umbisiklik, indefinite person)の例。不定人称文は、主語を明示しない構文で、用法上、ドイツ語の man を主語とする構文やフランス語の on を主語とする構文と共通するところがある。
- 7) 興味深いことに、フィンランド語では、(4)に対応する構文で、属格と接格が競合する。すなわち、明らかに所有を表す場合[cf. (4a)]には接格が用いられるのに対し、所有の観念が薄い場合[cf. (4b)]は、例文(i)(ii)のように属格と接格のいずれも用いられ、所有の観念がまったくなくなると[cf. (4c)], もっぱら属格が用いられる。
- (i) *Minu-lla* on nälkä. [cf. (4b)]
1sg. ADE be. 3sg hunger. NOM
わたしは空腹だ[わたしは空腹をもっている]。
- (ii) *Minu-n* on nälkä.
1sg. GEN be. 3sg hunger. NOM
わたしは空腹だ。
- 8) Wiedemann は独自の音素表記を用いているが、ここでは現代の正書法に合わせて書き換えて引用する。(15b)に関して、Wiedemann は、(iii)のように接格の代わりに向格が用いられた用例も引いている。
- (iii) *Mulle* on hobune varastatud.
1sg. ALL be. 3sg horse. NOM steal. INDEF. PERE
わたしのために馬が盗んできてある。

ドイツ語では、この(iii)に相当する文も(16b)となる。これはドイツ語の与

格名詞句の多義性のためだが、エストニア語の文法で「与格」の問題を考える場合には、接格のほかに向格も考慮する必要がある。なお、(15a) (15b) に対応するフィンランド語の文では、接格の代わりに奪格が用いられることからわかるように、フィンランド語には、ドイツ語の「任意の与格」に相当する現象が見られないと言ってよい。

文 献

- Engel, Ulrich 1988. *Deutsche Grammatik*. Heidelberg: Julius Groos Verlag
- Helbig, Gerhard und Joachim Buscha 1987¹⁹. *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie
- Jung, Walter 1990¹⁰. *Grammatik der deutschen Sprache*. Mannheim: Bibliographisches Institut
- Lavotha, Ödön 1973. *Kurzgefaßte estnische Grammatik*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- Leberecht, Helmi 1989. *Räägime eesti keelt. Мы говорим по-эстонски*. Tallinn: Valgus
- Luts, Oskar 1982. *Kevade*. Tallinn: Periodika (13th edition)
- Matthews, W. K. 1954. "Linguistic Aspects of Estonian," in *The Slavonic and East European Review*, Vol. 32, 291-317
- Mihkla, K. et al. 1974. *Eesti keele lauseõpetuse põhijooned I*. Tallinn: Valgus
- Mihkla, K. and A. Valmis 1979. *Eesti keele süntaks kõrgkoolidele*. Tallinn: Valgus
- Mänd, Heljo 1983. *Väikesed võililled*. Tallinn: Eesti Raamat
- Päll et al. 1962. *Сопоставительная грамматика эстонского и русского языка*. Tallinn: Eesti Riiklik Kirjastus
- Tauli, Valter 1983. *Standard Estonian Grammar. Part II. Syntax*. Uppsala
- Valmet et al. 1981. *Учебник эстонского языка*. Tallinn: Valgus
- Wegener, Heide 1985. *Der Dativ im heutigen Deutsch*. Tübingen: Gunter Narr
- Wiedemann, F. J. 1875. *Grammatik der ehstnischen Sprache*. St.-

Pétersbourg : Académie Impériale des sciences

- 松村一登 (1985) 「フィンランド語の文法構造」『アジア・アフリカ文法研究』
14 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所), 17-40
- (1988) 「エストニア語」『言語学大辞典』上巻 (三省堂), 913-930
- (1991) 『エストニア語文法入門』 (東京外国語大学アジア・アフリカ
言語文化研究所)